

採食行動に見るニホンザルの知性

半谷 吾郎(京都大学霊長類研究所)

わたしは、ニホンザルをはじめとする野生の霊長類の採食行動を、長年研究してきました。スーパーマーケットに行けば、食べ物がかんたんに手に入れられる現代の日本人とは違い、彼らは森の中で食べられるもののある場所まで行き、その中で食物を探索し、ときには食べられる部分を取り出し、食べられない部分を捨てる処理をして、食物を手に入れます。ニホンザルの主な食物である植物も、ニホンザルと同様、生物進化の過程を経て生き残ってきた生物ですから、食べられないためのさまざまな仕組みを持っています。種子を覆う堅い殻や、青酸などの毒は、動物に食べられないために植物が進化させた防御方法です。ニホンザルは、採食のための特別な体の仕組み、たとえば一生伸び続けて堅いものをかじることのできる切歯や、猛毒を解毒化する特殊な消化システムを持っていません。彼らが発達させたのは、食物を上手に扱う器用な手と、食物を探し、処理する知性です。ニホンザルの採食行動を観察してきた経験から、彼らの「賢さ」が、生きる上でどのように役に立っているのかを、考えていきたいと思えます。



図の説明

野生のニホンザルは季節により多様な植物を採食する。左上から地衣類、サクラの花、ヒメバライチゴの葉など。



京都大学霊長類研究所 准教授

1997年京都大学理学部卒業。2002年、京都大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。2006年より現職。

専門は動物生態学。屋久島のニホンザルの生態学的 研究を長年行っている。